

地域の特性を活かし高校生の実践力を向上させる教育手法の研究～平成咸宜園の事例より～
 Research of the educational technique which harnesses the characteristic of regional and raises a high school student's practice power. ～From the case with HeiseiKangien～

梅嶋真樹¹

Masaki UMEJIMA¹

杉原亨[†]

Toru Sugihara[†]

武内亜里[‡]

Ari Takeuchi[‡]

¹慶應義塾大学院 政策・メディア研究科

¹Graduate School of Media and Governance, Keio Univ.

^{†‡}慶應義塾大学SFC研究所

^{†‡}Keio Univ Research Institute at SFC

概要

慶應義塾大学SFC研究所 collaboyou 研究開発チームでは、高校生の「実践力」を育成する教育プログラム『平成咸宜園』を大分県日田市をモデル地域に特定し、2007年9月より設計・運用している。本研究の目的は『平成咸宜園』の活動そのものが実践力の育成を達成できたのか、その成果と課題点を検証することである。尚、本研究は、昨今総合的な学習の時間などで育成する必要性が提起されている「実践力(生きる力)」の育成方法の検討に寄与するものである。

<キーワード: 総合的な学習の時間・遠隔教育・学習・コミュニケーション・授業設計>

1. 平成咸宜園設立の背景

平成8年に文部科学省が、『変化が激しく学問を横断した実践力が求められる時代となってきた昨今においては、「生きる力」が必要であると提起した。(文部科学省中央教育審議会第一次答申(平成8年7月)より)』。そこで、その力を育成するために「総合的な学習の時間」が組み込まれた。

総合的な学習の時間は、教科教育のように明確な指標や教科書がないため、まだそれに有効なプログラムが確立されていない。咸宜園の活動は、そのような総合的な学習の時間が抱える課題を解決すべく活動が始められた。

2. 平成咸宜園概要

慶應義塾大学SFC研究所 collaboyou 研究開発チームでは、高校生の「実践力」を育成する教育プログラム『平成咸宜園』を2007年9月より設計・運用している。平成咸宜園が目指すのは、第1に、高校生の実践力(自ら学び考える力)の向上を図ること。第2にその土地ごと(特に地方都市)の特性を生かした教育プログラムを確立することである。

2-2. 『育成する人材像』

平成咸宜園では、育成目標である「実践力」を「自律し挑戦し続ける力」と定義し、それをさらに以下の3つの力に分解した。

育てる人材像	人材像詳細
自律し、挑戦し続ける人	1) 高いコミュニケーション能力を持っており、さらにそれを成長させる楽しさを分かっている
	2) 問題解決する目標を自分で定めており、さらにそれを成長させる楽しさを分かっている
	3) 実践を基にした自信を持っている

2-3. 『教育カリキュラム』

2-2. で設定した3つの人材要件を身につけるために必要なカリキュラムとして以下3つのプログラムを実施している。前提としているのが、地元(大分県日田市)が抱える問題を高校生が解決することである。

カリキュラム1) Communication

- 論理的なコミュニケーション力を向上(人材要件の1)させ、さらに成長し続ける事の楽しさを分らせるため、コミュニケーション手法を伝授し、その実践機会を提供するというプログラム
- 初年度は、講師が大学時代に研究していたコミュニケーション論の授業を実施した

カリキュラム2) Knowledge

- 問題解決する目標を自分で定められる(人材要件の2)ようにし、さらに成長し続ける事の楽しさを分らせるため、地元(日田)が抱える問題を調査分析するというプログラム
- 初年度は、日田が抱える課題の特定を「観光」に絞って活動し、大分県日田市が観光面で抱える課題を日田市や大分県の統計資料を使い調査分析し、レポートを作成した

カリキュラム3) Action

- 実践を基にした自信をもたせる(人材要件の3)ために、地元(大分県日田市)が抱える問題の一部を解決するプログラム
- さらに、実践への評価と各方面で活躍する先輩に触れる機会を創るというもの
- 初年度は、カリキュラム2)で特定した課題について、それに対する解決策を高校生と共に考えた。また、その考えた解決策を実際に実行に移した。(2008年9月完成予定)

2-4. 『活動方法』

毎週日曜日の夜に、WEB 会議システムを利用し、遠隔上で授業を実施。(現在の参加学生は2名)

遠隔で授業を行っている事により、地理的条件を超えて教師を務めるが出来る。これは、地元を離れて活躍している諸先輩の知識や経験を、出身地に還元できるため、地方地域で起こりがちな人材の流出に影響を受けることなく、教育活動をできることが利点である。

尚、本活動は高校生の参加費無料で行われており、参加の意思さえあれば誰でも参加できる形式をとっている。

2-5. 『名前の由来』

平成咸宜園という名前は、大分県日田市に昔栄えていた「咸宜園」という私塾から名前をとっている。私塾の名前を参考にしてしている理由は、社会問題に常に接しながら学ぶという私塾の教育スタイルが現代の総合的な学習の時間の問題を解決するヒントになると考えたためだ。

3. 平成咸宜園の活動の特色

平成咸宜園の活動の特色は以下3点である。

・課題をそのまま日田市における社会問題として

実践力を身につけるためには、社会に接しその中で実践的なプログラムを行うべきだと考えている。

そこで、初年度は大分県日田市の観光が抱える問題を、「日帰り観光客が増加しているという社会的流れに対して、日田市は観光資源が点在していることと、域内交通手段が発達していない事から観光機会を逃している」と特定し、観光業が今後発達していくためには「点在している観光資源の視覚化」と「域内交通手段の整備」が大切であるとソリューションを特定した。現在は「点在している観光資源の視覚化」について、実際に地元取材した新聞を創設することで実行に移している(2008年9月完成予定)。

・体験だけで終わらず、問題解決の**実践**までを行う点

仮説ではあるが、実践力を身につける(総合学習でいうところの「自ら学び考える力を身につける」ことや、「問題を解決する資質や能力を育成する」こと)のためには、実際に問題を解決する活動を何度も繰り返す必要があると考える。そこで、平成咸宜園では、高校生が考えた課題解決策を実際に実行するところまでを支援している。

・IT活用で学外の人材を**継続的に**教師として活用する点

社会の課題を解決するためには、その道で現在活躍している(もしくは挑戦している)人材を教師とすることが有効である。この分野には教材がないため、「人」を教材化することが有効だからだ。ただし、よくありがちな体験型講座であれば、数時間外部人材に接するだけであるが、平成咸宜園では問題解決を実行するところまでを、支援するため、学外人材の継続的活用が必要となる。今回それを実現しているのは、ITをつかったコミュニケーションを主としていることである。

4. 平成咸宜園活動の成果と課題

初年度の活動の成果を、設計時に特定した3つの能力を育成できたか否かで測定した。測定手法は、参加した高校生2名(共に高2)へのアンケート(4段階評価)である。

その結果、参加生徒が全員(2人)プラス評価をつけたのは、人材要件3)の「実践を基にした自信をもっている」のみであった。その他の2つ、「高いコミュニケーション力を持っている」や「問題解決する目標を自分で定める」に関しては、1人が能力が向上したと答え、1人はしていないと答える結果となった。それにより、今回のような社会的活動を実践する経験は目的としていた実践力が身につけていなくても、高校生の自信となる事が分かった。

4-2. 現在抱えている課題

現在抱えている課題は、「“実践力”のレベルをどこに特定するのか」という事である。実践力には社会で通用するレベルと、高校生ならではのレベルが存在している。

設計当初は日田の社会問題を課題に設定し、それを解決することを目指していた。それが社会に出た後でも役に立つ実践力の育成に有効だと考えたからだ。実際に社会問題を解決するためには、(まだ実践力のない)高校生の場合、多くの活動時間を要する。しかし、現在の高校生は学校の補講や塾などで多くの時間が埋まっており、時間的余裕が無い。そのため、初年度に実行した解決策のレベルは、そのまま日田市における社会問題を解決するには至っていないのが現状である。

一方で、実践力のレベルを下げ高校生に合わせると、時間をかけることなく、高校生が無理なく出来る範囲での能力向上が見込める。ただし、そこで身につけた「実践力」は社会問題を解決するレベルではないことから、その必要性に疑問が残る。

5. おわりに

本発表結果は、生徒数が限定されていることもあり萌芽的研究の先行研究結果である。

<参考文献>

文部科学省 高等学校学習指導要領
文部科学省中央教育審議会第一次答申

慶應義塾大学 SFC 研究所プラットフォームデザインラボラトリに所属する collaboyou 開発チームは、コミュニケーション力の測定ツール【開発名称 i.pa アイバ】開発に2003年より着手し、「大学、学生、企業間の3者間の情報交換及び協働を活性化させることを目的とした情報プラットフォーム設計」に取り組んでいる。